

美作の考古学者 光井（本澤）清三郎について

豊島 雪絵

1. はじめに

光井（本澤）清三郎は、明治後期に美作地方の古墳の調査に携わった人物として知られる。言わば、美作の古墳について、はじめて考古学的な見地から評価を行った人物であるといえよう。

当時は文化財保護法（昭和 25 年（1950））成立以前であり、現在行われているいわゆる発掘調査は当然行われていない時代である。光井は、工事中あるいは開墾中に偶然発見された古墳の遺物について記録を残し、精力的に雑誌に投稿した。その結果、かつては存在していたであろう古墳の存在を、我々は知ることができるのである。

本稿では、教員として、在野の考古学者として記録を残した光井の踏査記録と、当時の出土遺物の一部を紹介する。なお、光井は明治 36 年（1903）に養子となり本澤姓となるが、記事の多くは光井姓の時に書かれたものであるため、ここでは光井清三郎と記す。

2. 光井清三郎略歴（表 1）

明治 10 年（1877）2 月 3 日、岡山県勝田郡廣野村字河面（現在の津山市河面）に、6 人兄弟の 2 番目として誕生。岡山県立師範学校を卒業後、主に現在の鏡野町内の学校に赴任した。考古学をはじめ、歴史、地理などに興味を示した。西南学院の教員仲間によれば、勤勉忠実な教師だったという。明治 36 年（1903）7 月、

津山町の本澤家を継ぎ、同年、キリスト教の洗礼を受けた。光井は信仰が厚く、内村鑑三を敬愛し、内村の発行する雑誌『聖書之研究』を愛読書としていただけてなく、本人を訪問し、交流したという。

地元を離れたのち、姫路や奈良の中等学校に長く赴任し、大正 9 年（1920）、最後の赴任先である西南学院に招かれ、2 年間宿舍監と教員を兼務していたが、大正 10 年（1921）、病に倒れ、同年死去。享年 44 であった。

3. 古墳の踏査と『考古界』への投稿（表 2、3）

光井は、明治 32 ～ 37 年（1899-1904）、鏡野町内の学校の教員時代に、主に鏡野、津山を中心とした美作地域での実地踏査、及び聞き取り調査の成果を雑誌『考古界』に頻繁に発表している。美作地域における調査について『考古界』に掲載されたものを、表 2 にまとめた。これらの掲載記事から、光井の踏査は、①明治 25、26 年（1892-93）に発生した第一、第二水害に伴う香々美川の堤防復旧工事のための石材抜き取りを行った際の出土遺物について、後年に聞き取りを行ったもの②土地所有者が開墾の際に偶然発見したものについて、後から現地に赴いて聞き取りを行い、現地に残された遺構や、出土遺物の実測等を行ったものに大きく分けることができる。

光井は、中でも陶棺に強い興味を示している。光井

明治10年（1877）2月3日	岡山県勝田郡廣野村字河面に生まれる。
明治32（1899）年3月	23 岡山県立師範学校を卒業し、東北條郡小中原尋常小学校に赴任。
明治34（1901）年9月	24 苫田郡鏡水高等小学校に赴任。校長を兼任する。
明治35（1902）年2月	文部省の中等学校教員試験に合格し、歴史科の免状を受ける。
明治36（1903）年7月	26 津山町の本澤家を継ぎ、本澤清三郎となる。苫田郡竹田高等小学校に転任。
明治37（1904）年4月	27 奈良県立畝傍中学校に転任。6年間勤務。
明治37（1904）年12月	27 奈良県でキリスト教の洗礼を受ける。
明治42（1909）年11月	32 兵庫県立姫路中学校に転任。11年間勤務。
大正9（1920）年4月	43 福岡県の西南学院に、教師兼舎監として招かれる。
大正10（1921）年9月	44 病に倒れる。
大正10（1921）年10月	44 病状回復せず、死去。享年44。西南学院の講堂で葬儀が執り行われる。

表 1 光井清三郎略歴

作成の『陶棺発見古墳地名表』には、東京大学編「古墳甌穴地名表」からの抜粋がみられることから、当時はまだ陶棺に関する研究史はなく、おそらく陶棺についての情報はこの文献から得ていたと思われる。

過去の文献と自らの調査事例をもとに作成したこの地名表は、その後の美作地域の考古学研究に大いに役立つものとなった。

4. 光井清三郎所蔵資料について（図1、2）

平成23年6月11日、光井清三郎氏の孫にあたる本澤信聖氏と、その妻である美代子氏が津山弥生の里文化財センターに来館された。その折、漆塗の箱に入れられた考古資料を持参されており、対応した筆者が夫妻に資料の整理と紹介をさせていただくことを依頼し、預かることとなった。

本澤家から預かった資料は、古墳時代の玉類、耳環

巻・号	発行年	題名	執筆者	概要
第1篇第11号	明治34 (1901)	陶棺埋没につきて (圖入)	光井清三郎	明治25～26年発見の、苫田郡大野村大字和田字櫻口（鏡野町和田）の古墳、及び香々美南村大字澤田の古墳の聞き取り調査。
第2篇第4号	明治35 (1902)	扉つきの陶棺（圖入）	光井清三郎	明治25～26年発見の坂谷古墳についての聞き取り調査。
第2篇第5号	明治35 (1902)	美作国苫田郡澤田村陶棺	光井清三郎 中島幹 和田千吉	明治26年12月、苫田郡香々美南村大字澤田字加市（鏡野町澤田）の古墳の聞き取り調査と、その後の現地調査。
第2篇第6号	明治35 (1902)	美作に於ける骨壺発見の古墳	光井清三郎	大野村大字和田字片平の陶棺をもつ3基の古墳のうちひとつに骨壺が発見されたことについての記録。
		美作考古界(1)墨痕ある祀部製脚杯盤	光井清三郎	苫田郡田邑村字宿の古墳出土の須恵器（台付椀）について。
		美作考古界(2)日上の古墳	光井清三郎	勝田郡河邊村大字日上の古墳（津山市日上 日上天王山古墳・日上畝山古墳群）及び『古塚』碑について。
第2篇第7号	明治35 (1902)	(1)埴輪圓筒につきて (圖入)	光井清三郎	坪井正五郎の円筒埴輪柴垣模倣説について言及。苫田郡香々美南村大字公保田（鏡野町公保田）の古墳出土の円筒埴輪に横ハケが施されていることから、この説を疑問視。
	明治35 (1902)	美作考古界（二） (3)陶棺発見地名表	光井清三郎	光井による実査・聞き取り、及び『東京帝國大學編纂古墳横穴地名表』に基づく陶棺発見古墳地名表（表3）。
	明治35 (1902)	美作考古界（二） (4)横穴	光井清三郎	勝田郡広野村大字河面の横穴墓について。須恵器の破片出土。
第2篇第8号	明治36 (1903)	美作考古界（三） (5)石棺発見地名表	光井清三郎	光井が調査した石棺発見古墳の地名表（別添1）。
	明治36 (1903)	美作考古界（三） (6)山西の石棺	光井清三郎	明治35年12月に踏査した苫田郡高野村大字山西證仙寺（津山市高野山西 正仙塚古墳）石棺の調査。石棺は20年程前に発見されたもので、人骨2体、直刀2、剣1などが出土。
	明治36 (1903)	美作考古界（三） (7)直刀について	光井清三郎	山西（正仙塚古墳）発見の直刀について。
第2篇第9号	明治36 (1903)	美作考古界（四） (8)芳野村の石棺	光井清三郎	苫田郡芳野村大字古川（鏡野町宗枝）の伊勢領大塚（大塚古）について。嘉永6年（1853）に発掘された際、人骨1体、枕（陶製？）1、鏡1、剣数口、須恵器等が出土。その後、露出した石棺のみ光井が調査。
	明治36 (1903)	美作考古界（四） (9)河面における発見品	光井清三郎	明治31年(1898)、勝田郡廣野村大字河面（津山市河面）で、道路建設の際に発見された遺物についての記述。
第2篇第10号	明治36 (1903)	美作考古界（五） (10)所謂藤房公の墳墓といふもの	光井清三郎	苫田郡中谷村大字中谷字近衛殿の古墳（櫛ぐろ古墳）について。直刀2、勾玉、須恵器、陶棺が出土。
	明治36 (1903)	美作考古界（五） (11)神庭村綾部の陶棺	光井清三郎	苫田郡神庭村大字綾部字新屋敷（津山市綾部）の古墳。明治30年に発掘され、1ヶ月後調査。陶棺1、銀環2、勾玉、土器多数出土。
	明治36 (1903)	美作考古界（五） (12)陶棺及石棺発見地名表補追	光井清三郎	第2篇第7号「陶棺発見地名表」、及び第2篇第8号「石棺発見地名表」の補追。
第2篇第12号	明治36 (1903)	美作考古界（六） (13)下押入の陶棺	光井清三郎	明治36年苫田郡高野村大字下押入（津山市押入）で、土地開墾の際に発見された古墳について。横穴式石室から陶棺、銀環4、金環2、水晶製切子玉2、灰白色石製勾玉1、瑪瑙小玉2、石製小玉2、須恵器多数出土。
第3篇第1号	明治36 (1903)	埴輪円筒と陶棺の脚と	光井清三郎	円筒埴輪のハケ目と陶棺の脚の類似点について。

表2 『考古界』への投稿記事（美作関係のみ）

	地名	実査の有無	出土遺物	備考
1	英田郡倉敷村大字三海田	実査	陶棺 1、須恵器、刀剣	江戸時代に発見。古墳は開墾されて畑になり、陶棺は近くに埋没。
2	勝田郡檜原村大字平福	(1-4) ※1		第1篇第4号で和田千吉により報告。
3	勝田郡広野村大字福井字本村	実査	陶棺 1、刀 1、石製勾玉 1、 <u>ガラス勾玉 1</u> 、出雲石管玉 1、切子玉 1、小玉、ナンキン玉、銀環（中空）2、鍍金銅碗 1、埴瓶、横瓮、高杯、杯、長頸埴等※2	明治20年発掘。
4	勝田郡大崎村大字新田新宮山南麓	実査	陶棺 2	
5	勝田郡湯郷村大字稲穂字福田		陶棺 3	東京国立大学編纂「古墳調査地名表」
6	勝田郡勝間田村大字岡字金毘羅山		陶棺 1	東京国立大学編纂「古墳調査地名表」
7	勝田郡勝間田村東吉田カマガ谷		陶棺 1	東京国立大学編纂「古墳調査地名表」
8	勝田郡勝間田村大字上相		陶棺 1	東京国立大学編纂「古墳調査地名表」
9	勝田郡勝間田村大字矢田字宮ノ下		陶棺 2、金銀環 6、土器、刀剣等。	東京国立大学編纂「古墳調査地名表」
10	苫田郡神庭村大字綾部	実査	陶棺 1、金環※3、勾玉、土器	
11	苫田郡香々美南村大字澤田字加市	実査	陶棺 4、須恵器、勾玉 2、銀環 2、金環 4、ガラス小玉14、直刀片	
12	苫田郡一宮村大字東田邊字六石	実査	陶棺 1	明治26～27年頃、堤防用石材採取の際発見。
13	苫田郡田邑村大字上田邑字宿	実査	陶棺、金環 2、壺 1、平瓶 1、須恵器盤 1、土師器盤 2、脚付盤 1	1882年に偶然発見。
14	苫田郡田邑村字登尾	実査 (2-6)	陶棺 1、須恵器	
15	苫田郡香々美南村大字香々美字新町小字法妙寺	実査	陶棺片、鉄轡、直刀、冑（鍍金）、土師器、須恵器	
16	苫田郡香々美南村大字香々美字藤屋	実査		破片のみの出土。
17	苫田郡香々美南村大字寺和田字下寺和田	実査	陶棺 1、土器	明治26～27年香々美川水害の後、堤防用石材採取の際発見。
18	苫田郡大野村大字和田字片平	実査		明治26～27年香々美川水害の後、堤防用石材採取の際発見。
19	苫田郡大野村大字和田字字狼谷（二ヶ所）	実査	陶棺各 1	明治26～27年香々美川水害の後、堤防用石材採取の際発見。
20	苫田郡大野村大字和田字字坂谷	実査 (2-4)	陶棺、皿？須恵器、花瓶形陶器、甕	明治26～27年香々美川水害の後、堤防用石材採取の際発見。
21	苫田郡大野村大字和田字字櫻口	実査 (1-2)	陶棺 3、人骨、刀、金環 4、銀環、勾玉	明治26～27年香々美川水害の後、堤防用石材採取の際発見。
22	苫田郡大野村大字和田字字上畑 2ヶ所	実査	陶棺各 1	明治26～27年香々美川水害の後、堤防用石材採取の際発見。
23	苫田郡大野村大字和田字字甚五郎山	実査	陶棺 1、土師器、須恵器、銅環？	明治26～27年香々美川水害の後、堤防用石材採取の際発見。
24	苫田郡大野村大字土居雄山北麓二ヶ所	実査	陶棺各 1、土器、勾玉、刀	
25	苫田郡中谷村大字入 2ヶ所	実査	陶棺各 1	
26	苫田郡中谷村大字中谷字近衛殿	実査	陶棺 1、金銀環、勾玉、刀剣、鉄鏃、須恵器	明治18年発掘。萬里小路藤房公の墳墓と称する。
27	勝田郡大崎村字金井字植木ショウガタニ	伝聞	陶棺 1	明治34年発見。
28	英田郡大野村大字野形	伝聞	陶棺 1	明治35年発見。
29	勝田郡河辺村大字日上	実査 (2-6)	陶棺 4～5？	
30	苫田郡東苫田村大字勝部	伝聞	陶棺	
31	苫田郡一宮村大字西田邊字上向山	実査	陶棺 1、須恵器	明治26、7年の頃、石礫の石を探る際に発見。
32	苫田郡一宮村大字西田邊字土居？	実査	陶棺 1、須恵器、皿、高杯等	明治27～28年、開墾の際陶棺を発見したが、破壊して石室に埋められた。
33	勝田郡広野村大字福井字土居	実査	陶棺片	
34	苫田郡神庭村大字草加部字京原	伝聞	陶棺、金環、勾玉、土器	明治28年発見。
35	勝田郡南和気村大字連石	伝聞	陶棺、刀剣、金環 2、鏢、轡、鏃等	明治元年頃発掘。
36	勝田郡河辺村大字国分寺 後の山		陶棺	明治34年津山中学校教諭故吉本氏の発見。
37	苫田郡横野村		陶棺	

※1 「実査の有無」欄にある数字（2-6）等は、「第2篇第6号」に関係記事のあることを指す。※2 下線は、光井所有のものとされる。

※3 第2篇第10号で銀環 2 に訂正。

表3 陶棺発見古墳地名表（『考古界』第2篇第7号・第10号）

地名		発掘されたもの	事歴
1 英田郡倉敷村三倉田 長大寺山	伝聞	石棺 1、人骨、刀剣、鐔、轡等	明治10年の発見。
2 苫田郡一宮村大字西田邊 有木峠	実査	陶棺 1、須恵器数個、銀環等	明治26年頃、道路改修の際に石材をとるために発見。板状の石を組み合わせたもの。円墳。土器は郡書記某氏が有す。
3 苫田郡大野村大字土居字赤峪	実査	石棺 1	明治35年 8 月和田千吉とともに調査。板状の石を組み合わせたもの。蓋はなく、底に礫を敷き詰めている。副葬品なく、過去数年の間に盗掘されたか。
4 苫田郡高野村大字山西字ショーセンジ			別項参照
5 苫田郡芳野村大字古河字ムネダ?	実査	石棺 1、人骨、枕、鏡等	東京国立大学編纂「古墳調査地名表」にあり。
6 苫田郡東苫田村大字沼	伝聞	石棺 2、刀剣	

表 4 石棺発見地名表（第 2 篇第 7 号・第 10 号）

などで、光井が踏査を行った横穴式石室を持つ後期古墳の出土遺物が多くを占めている。中には、光井が数多く踏査を実施した陶棺からの出土遺物も存在すると思われる。滑石製品のように、主に 5 世紀代の古墳から出土する遺物もみられる。すべての遺物については、日付や出土地点等の記載が一切みられないため、『考古界』に掲載された記事から推測するほかない。また、これらの資料の中には、『考古界』に掲載された古墳からの出土遺物でないものも含まれる可能性がある。また、玉類や耳環は、光井が踏査を行った複数箇所の古墳から出土しているため、個々の遺物について出土地を特定することは不可能であった。

今回の報告では、これらの出土遺物を資料紹介として掲載する。

①石製品（7～22）

刀子 1、勾玉 11、白玉 4 がある。刀子は、残存長 3.6 cm で、皮鞘の縫い合わせの表現がなく、簡略化されたものである。勾玉は、長さ 1.7～2.3cm に収まるもので、色調からは、同一の古墳等からの出土ではなく、複数箇所からの出土遺物を集めたものと推測される。白玉 4 点のうち 3 点は直径 7～10mm のもので、1 点は、直径 4 mm のものである。

これらは主に古墳時代中期にみられるものであり、滑石製勾玉は、美作地域では、箱式石棺等に埋葬されている例がある（注 2）。

②碧玉製品（1・3～6）

勾玉 1、管玉 4 がある。勾玉は半分を欠損しているが、大形のものである。管玉は、暗緑色のものが 2 点、白色のものが 2 点ある。いずれも片面穿孔である。

③瑪瑙製勾玉（23・24）

合計 2 点ある。23 は赤色透明色、24 はやや黄色味を帯びた白色透明色、長さ 2.9cm をはかる。いずれも片面穿孔である。

④水晶製勾玉・切子玉（25・26）

勾玉は長さ 2.6cm、無色透明で、片面穿孔である。26 は両面穿孔の切子玉で、長さ 2.4cm をはかる。

⑤ガラス勾玉・小玉（2・33～103）

2 は、濃緑色の勾玉で、長さ 1.8cm をはかる。ガラス小玉は合計 71 点ある。33～35 は直径 0.9～1 cm、長さ 0.5～0.8cm をはかる濃紺色のガラス小玉で、3 点ある。大きさ、色調ともに類似していることから、同じ古墳からの出土である可能性が考えられる。その他のガラス小玉（36～103）は、単体で木箱の中に糸で固定されていたもの 7 点と、連結して固定されていたもの 3 連（15 点、21 点、25 点）がある。

⑥耳環（27～32）

金環が 4 点（27、28、30、32）、銀環が 2 点（29、31）ある。いずれも銅芯である。27 のみ中空である。28 は金箔が良好に残る。大きさは、27・28 が 2.3～2.4 cm、29・30 が直径 3 cm 前後、30、31 が 3 cm を超える。材質、大きさ、重量等にはばらつきがあるため、対になるものはなく、それぞれ別の古墳等からの出土遺物と考えられる。

5. おわりに

本稿では、明治時代、美作地域を中心に精力的に踏査を行った光井清三郎について、出土遺物とともにその足跡を追った。

最後に、貴重な資料を提供していただき、資料の紹介及び掲載についてご快諾いただいた本澤信聖 氏、本澤美代子 氏に心からお礼を申し上げます。

（注 1）光井の略歴については、本澤氏から預かった遺物とともに、西南学院の教員仲間によって光井の略歴が記された文書が残されており、これを参考にした。

（注 2）津山市押入兼田 1 号墳の箱式石棺内から出土している。

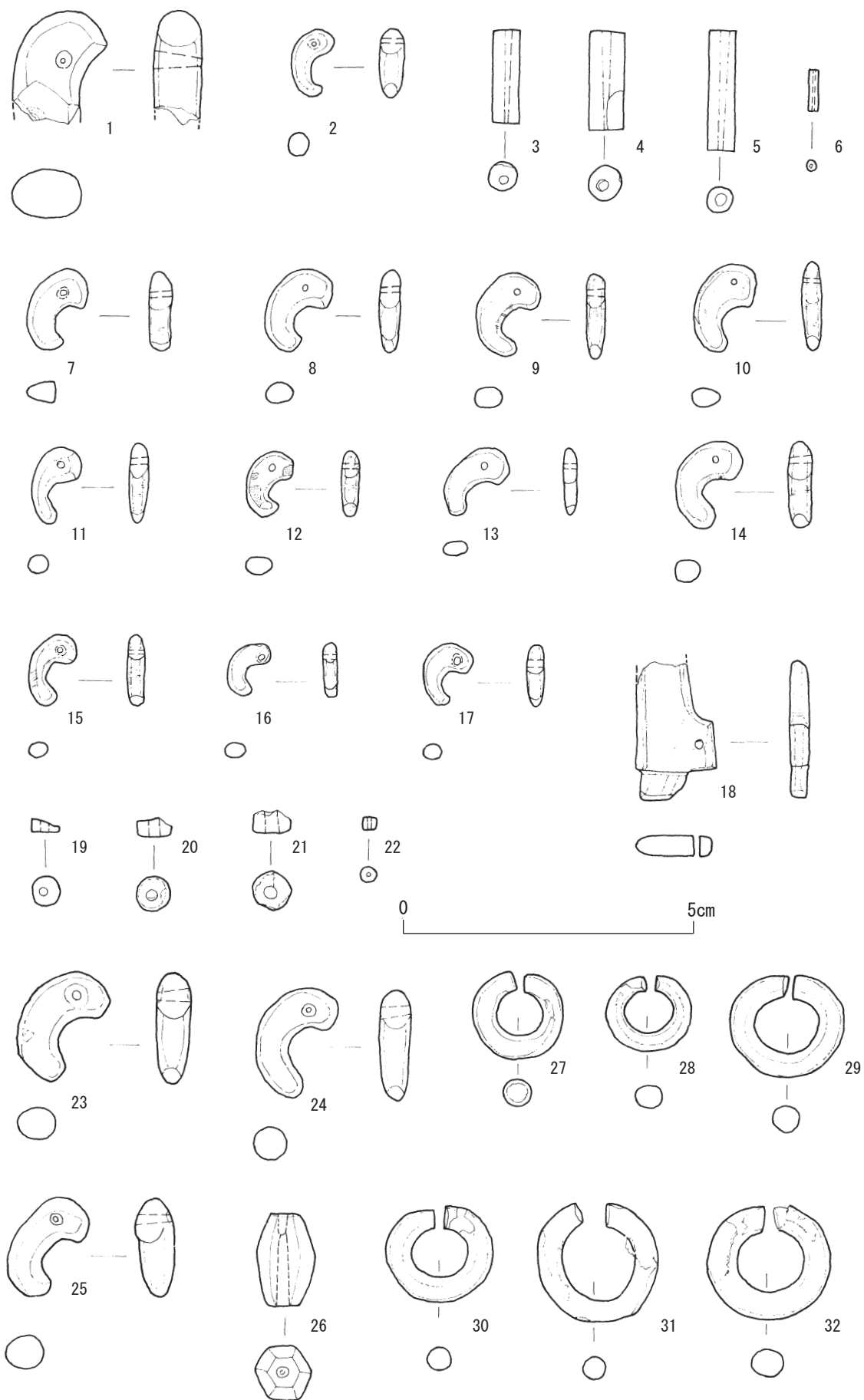


図1 光井清三郎の資料1 (S=1/1)

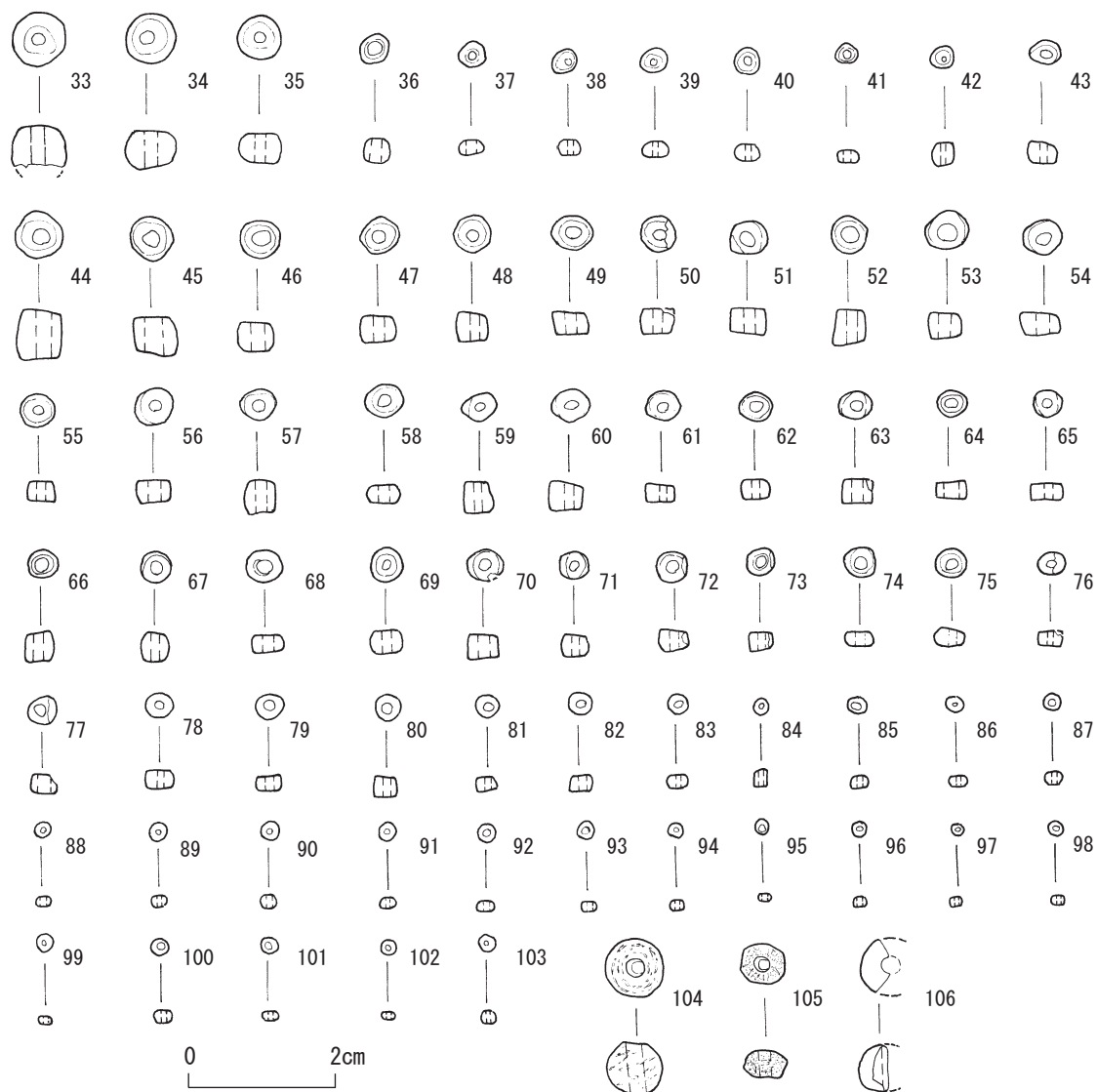


図2 光井清三郎の資料1 (S=1/1)



写真1 光井清三郎の資料